東日本大震災復興支援第１回シンポジウム

長崎から福島へ　～放射線の正しい理解のために～

日時：平成 23 年 5 月 20 日（金）14：00～16：00
会場：青山ダイヤモンドホール「ダイヤモンドルーム」

（司会）

それでは時間になりましたので、ただいまより長崎・ヒバクシャ医療国際協力会によります、東日本大震災復興支援第１回シンポジウム、「長崎から福島へ～放射線の正しい理解のために～」を開催いたします。

私は、本日の司会を務めます、長崎大学医歯薬学総合研究科の高村と申します。どうぞよろしくお願いします。

初めに、主催者であります長崎・ヒバクシャ医療国際協力会会長の蒔本恭、長崎県医師会長がご挨拶いたします。蒔本会長よろしくお願いいたします。

（蒔本会長）

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会会長の蒔本でございます。本日は大変お忙しい中に、報道機関を初め、多数の皆様にお集まりをいただきまことにありがとうございます。主催者を代表いたしましてご挨拶を申しあげます。

初めに、この度の東日本大震災により犠牲になられた皆様のご冥福をお祈りいたしますとともに、被災された皆様に心からお見舞いを申しあげます。

さて、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（ＮＡＳＨＩＭ）は、これまでチェルノブイリ原発事故や、カザフスタン核実験による被害を受けた国々の医師を招聘して、被爆地長崎が有する医療の研究成果を活用した研修を行なったり、長崎の専門家を海外に派遣するなど、様々な形で国際貢献を行なってまいりました。

ご承知のように、３月１１日に発生しました東日本大震災は未曾有の被害をもたらし、福島原発事故による放射線の影響により、大きな社会不安が生じております。私たちは、放射線に関する正しい知識の普及を図ることが、この度の福島原発事故による風評被害を払拭する一助になればと考え、東京において「長崎から福島へ」をメインテーマに、３回にわたるシンポジウムを開催することといたしました。本日は第１回目として、主に報道関係者の方々にお集まりをいただき、「～放射線の正しい理解ために～」をサブテーマに長崎大学の山下教授と松田教授の講演を行ないますが、皆様には放射線に関する知識をさらに深めていただき、より多くの方々に放射線に対する正しい知識をお知らせいただきますようお願い申しあげます。

本日のシンポジウムを契機として、風評被害が一掃され、一日も早い東日本の復興が遂げられますことを切にお願いいたしまして、挨拶といたします。

どうぞよろしくお願いたします。

（司会）

蒔本先生ありがとうございました。ご案内のように、本シンポジウムは長崎県並びに長崎市が東日本

大震災の復興支援として取り組んでいる事業でございます。今回、この第１回の開催に当たり、長崎県知事そして長崎市長から被災地へのエールをお送りしたいと思います。初めに、中村法道長崎県知事がご挨拶を申しあげますが、知事が急用のため出席できませんので、代わりまして田中桂之助副知事に出席をいただいております。では、田中副知事よろしくお願いいたします。

（田中副知事）

皆様こんにちは。今日はこのようにたくさんお集まりをいただきまして、まことにありがとうございます。長崎県の副知事の田中と申します。本日はお集まりの皆様に、長崎県知事の中村法道からメッセージを申しあげるように仰せつかってまいりました、ご紹介を申しあげます。

初めに、さきの東日本大震災により、不幸にしてお亡くなりになられた多くの皆様方のご冥福をお祈り申しあげますとともに、被災されました多くの皆様に、心からお見舞いを申しあげます。

私ども長崎県は、昭和５７年の長崎大水害、そして平成２年に噴火をし、翌平成３年から長きにわたって大きな被害を及ぼしました雲仙普賢岳噴火災害といった、大きな災害を受けてきた県でございます。この災害からの復興に当たりましては、全国から多くの皆様方に心温まる善意を寄せていただき、そして復興を遂げてきた県でございます。

私どもは、この度の東北３県の東日本大震災に当たりまして、これまでいただいたご支援へのご恩返しといった思いを込めまして、福島県を中心に東北３県に対しまして、救援物資はもちろん医療関係を含む県市町の職員約６００名、そして県内の警察、自衛隊、海上保安部２９００名現地に入って支援を行なってまいりました。また、長崎大学、県医師会、日赤、こういった医療関係の皆様は、被害直後から直ちに現地に入られて医療の支援を行なってきたところでございます。

遠い長崎ではございますけれども、被災者の皆様が一時的に避難をされますならば、県内のホテル、旅館、市、町、民間と協力をいたしまして、そういった宿泊施設のご用意、あるいは長崎までおいでいただく交通手段のご用意、さらには高校、中学校、学校単位で受け入れていくような準備もさせていただいておるところでございます。

このような中で、先ほど蒔本会長からのご紹介がございました、現地で放射線医療に携わっていただき、放射線の正しい知識を説明してこられました山下先生、松田先生をはじめとする長崎大学の先生方からこのようなお話をいただきました。と申しますのは、被災地の方々が、今回の原発事故による放射線被害に悩んでおられるだけでなく、放射線に関する誤った認識によって、風評被害を大変に心配をしておられる。そして、地元を初め全国の皆様に、正しい知識の普及を強く求めておられるということを伺ったわけでございます。

そして、先ほどご挨拶をされました長崎県医師会蒔本会長を初めとする長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の皆様が、今長崎県だからこそできることは何かということを考えられ、このようなシンポジウムの開催に至ったわけでございます。

私ども長崎県も、また今日ここにおいでの田上長崎市長さんも、原爆被爆者医療から得た多くの経験・知識を生かしていただくことが、長崎だからこそできる支援であり、被災地の復興支援のために、この事業に取り組んでいかなければならないという思いに至ったわけでございます。

今日のシンポジウムを、お集まりの皆様が持っておられる大きな情報発信力によって広めていただき、多くの方々が、放射線に対する正しい認識を持っていただくことにつなげていただくことを期待申し上げております。

私ども長崎県民は、被災地の一日も早い復興を願い、私たちにできることを一つ一つ積み重ねてまいります。どうぞ、皆様方のご支援・ご協力をこころからお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。
長崎県知事中村法道からのメッセージでございます。今日は、よろしくお願いいたします。

（司会）
ありがとうございました。引き続きまして、田上富久長崎市長がご挨拶いたします。田上市長よろしくお願いいたします。

（田上市長）
皆様、こんにちは。今日は「長崎から福島へ」ということで、東日本大震災の復興支援第１回シンポジウムを開催しましたところ、本当に多くの皆様にご出席をいただきまして、心からＮＡＳＨＩＭの構成員のメンバーの一人としてお礼を申し上げたいと思います。
また、と同時に、改めて福島初め、宮城、岩手、茨城、今回の震災で被災された皆様に心からお見舞い申し上げたいと思いますし、亡くなられた多くの皆様のご冥福をお祈りしたいと思います。
今このシンポジウムを開催した意義については、蒔本先生、田中副知事からお話がありました。そのことについて、皆さんも十分ご理解のうえ参加をいただいているという風に思います。
私たち長崎の町は、昭和２０年８月９日、６６年前に、原爆の惨禍を体験しました。そして、それからこの核兵器を、もう一度人類が使うことがないように、そして、この核兵器を世界中からなくすようにということで、様々な活動を繰り広げてきました。その中で、一番今も古くて新しい問題として残っているのが、事実をしっかり知っていただくということです。原爆が人間に何をもたらすのかということを、十分理解していただけてないために、いまだに核兵器に対して、あるいは広島、長崎に落とされた原爆について様々な誤解があり、そしてそれが核兵器をなくしていく動きの支障になっています。今もそのことは、最も大事な私たちの活動の柱になってきています。
今回の福島の原発事故に関しても、その意味では、まずしっかりと事実を知る真実を知るということが一番重要であるという意味では、変わらない共通のテーマであると思います。特に、事実を知らないことにより不安が広がり、あるいはそのことによって起きる必要のない差別が起きたりするようなこともあり得る。あるいは、もうすでに起きているという報道もあっております。
そういう意味では、今回このシンポジウムに参加いただいた皆様に、ぜひ事実をしっかり知っていただいて、そしてそのことを皆さんからお伝えいただいて、その輪が広がっていく中で、福島の皆さんの不要な不安を取り除き、一刻も早く復興するようにその力に皆さんになっていただきたいというふうに思っております。そして、あわせまして今回私も福島にもお邪魔をしましたが、本当に長崎大学の先生方の力が非常に現場の不安を抑えるのに、大きな力になっているということを身をもって感じました。
その中で改めてこのＮＡＳＨＩＭの活動であったり、あるいは長崎大学の先生方のお話であったりというのが、普段なかなか外にいる皆様に見えない中で研究を進めておられてますけども、その目に見えにくい研究の価値ということについても、この際改めて考えていただく機会にしていただければという風に思います。こういった、地道でそしてまたチェルノブイリも含めた積極的な行動による研究が、いかに私たちを救う力になるかということについても、私たちはもう一度考える必要があるのではないかというふうに思います。今日のシンポジウム、そういう意味で、皆様にお聞きいただく中で様々なことをこれから私たちが一緒に考えていかないといけないあるいは一緒に取り組んでいかないといけない

様々な課題についても考えをめぐらす機会になればというふうに思います。

改めて、本日のシンポジウムが有意義な時間になりますように、そしてまた今日のシンポジウム１回目ですのでこれから２回、３回と続けて開催をされますので、ぜひ今回お越しになっておられない皆様にもお声をかけていただく、あるいは、皆様から今日お聞きいただいた内容についてお伝えいただくということについても改めてお願いを申し上げさせていただき、私からのお礼のご挨拶にさせていただきたいと思います。本日はよろしくお願いいたします。